The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 山口県豊関方言の「のだ」相当形式について |
| Author(s) | 中田, 一志 |
| Citation | 日本語・日本文化研究. 2024, 34, p. 1-24 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/101313 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 山口県豊関方言の「のだ」相当形式について

中田　一志

## 1　はじめに

『山口県のことば　日本のことばシリーズ 35』（以下、『山口県のことば』）では山口県で話される方言を周防方言，長門方言そして萩方言に分け，それぞれの形式名詞について次のように記述されている。周防方言の「形式名詞の「の」には、主に〜ホが使用され」、長門方言の「形式名詞「の」は、周防方言と同じく〜ホが使用される」[1]。しかしながら，長門方言に関しては，『全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」第 15 巻 広島・山口』及びそれをデジタル化した『日本語諸方言コーパス』(Corpus of Japanese Dialects ： COJADS) で長門方言の一方言である豊関方言の資料をみる限り，形式名詞「の」に対応する形式は文末詞ホだけでなく，ソも用いられている。

『山口県のことば』で挙げられた周防方言及び長門方言の例は次の通りである。イ）ロ）は形式名詞，ハ）ニ）は文末助詞の〜ホの用法である。

イ)　オーキーホガ ホシー（大きなやつが欲しい）。

ロ)　ワタシノホジャ（私のだ）。

ハ)　イクホジャ（行くのだ）。

ニ)　イクホ（行くよ）。

COJADS における山口県の方言談話の属性は次の通りである。

収録地点 ： 山口県豊浦郡豊北町阿川　　収録日時 ： 1978 年（昭和 53）年 8 月 3 日

話題 ：「井戸掘り，箱苗，農業の今昔」　　収録時間（CD） ： 37 分 09 秒

話者は 3 名で次の通りである。

| A　男性 | B　女性 | C　男性 |
|---|---|---|
| 明治 44 年生　収録時 67 歳 | 明治 29 年生　収録時 82 歳 | 明治 44 年生　収録時 67 歳 |

文末詞ホ及びソの使用回数は次の表の通りであるが，これを見るとこの方言では同一話者が両方の文末詞を使っていることが分かる。

| 話題 | 井戸掘り | | | 箱苗 | | | 農業の今昔 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 話者 | A | B | C | A | B | C | A | B | C |
| ソ | 12 | 2 | N/A | 12 | 1 | N/A | 5 | 1 | 1 |
| ホ | 6 | 4 | N/A | 1 | 0 | N/A | 4 | 2 | 0 |

本稿は，豊関方言では文末詞ソとホの働きに違いがあるのか，もし違いがあるのならばどのような使い分けをしているのかを考察するものである。また，最後に共通語の「のだ」形式との関連についても議論する。

## 2 聞き手への持ちかけの度合い

「聞き手への持ちかけ」という概念については日本語学の分野では定着した定義がないように思われるので，ここである一定の定義をしておく。蓮沼（1988）では終助詞「ね」の用法を次の三つに分類し，それらは話し手が聞き手に同意を求めながら持ちかける「同意要求」，同じく確認を求めながら持ちかける 「確認要求」，そして話し手がその場で認識したことを単に持ちかける「自己確認」としている。いずれの用法も発話が聞き手に対して何らかの作用をもたらすものである[2]と考えると，「同意要求」や「確認要求」は聞き手に対して何らかの反応を要求するものから，その作用が強く，「自己確認」は話し手が自ら確認していることを聞き手に二次的に伝えるものであることから，その作用が弱いと考えることができる。即ち「要求」のように聞き手に対する何らかの働きをするものは持ちかけ度が強く，単なる情報の伝達は弱いと考えられる。

ただ，情報伝達であっても聞き手への持ちかけ度合いに強弱があるように思われる。話し手の発見したこと，驚きや自慢などは聞き手への持ちかけ度が相対的に強く，話し手が語る連続的で一まとまりの事態（以降「一まとまりの事態」）は総体として聞き手への持ちかけは強いだろうが，その一部分，例えば過程の一段階のみや結果のみは持ちかけ度が相対的に弱いと考えられる。このような聞き手への持ちかけの度合いが文末詞ホとソの分布に極めて関与的であるように思われる。

次の断片 1 では話者 B の長男が井戸を掘る場所について質問し，話者 A が 37 行目のように返答する。

**断片 1**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 34 | A | ドッチガ　ミズガ　デヨーカイナーッテ | どっちが　水が　出るだろうかなと |
| 35 | A | ユーカラ。 | 言うから。 |
| 36 | B | ハー。 | はあ。 |
| 37 | A | ドッチモ　デルッテ　ワシガー　**ユータホ**。 | どっちも　出ると　俺が　**言ったの**。 |
| 38 | B | ｛笑｝。 | ｛笑｝。 |
| 39 | A | ドッチ　ホッテモ　デルッテ。 | どっちを　掘っても　出ると。 |

この A の「教示」あるいは「強調」[3]は，38 行目の B の笑いの反応，39 行目での繰り返しから聞き手への持ちかけ度が強いと考えられる。ここで文末詞ホが用いられている。

断片 2 では話者 A は話者 B の孫が掘った井戸に入って底を見ると，焼けたような層から水が出てきたから 178-180-183 行目で問題ない，素人が掘っても崩れるような層ではないと述べる。そこで B はその瞬間を回想したのであろうか極めて唐突に 185 行目で孫が独りで井戸を掘り当てたことに思いを馳せる。

**断片 2**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 178 | A | アノ　ソーガ　デタラ　モットモ　エーソエナ。 | あの　層が　でたら　いちばん　いいんだよね。 |
| 179 | B | アー。　ソレカナー。 | ああ。　そうなの。 |
| 180 | A | ヘテ　フノ　エー　コトニャー　モー　ツイ　シロートガ　ホッテモ　ツイ　クエルヨーナ　ドロジャ　ナーカラ。 | そして　運の　いい　ことには　もう　ちょっと　素人が　掘っても　ちょっと　崩れるような　泥では　ないから。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 181 | B | ハー | はあ |
| 182 | B | ソリャ。 | それは。 |
| 183 | A | アレ　バサーリバサーリ　コー　ホル　ウチニーヨコッチョノ　ホーガ　クエチャー〔25〕ナー。シロートワ　オソロシューテ。　ソリャ　ヤリャー　エンケド。 | あれ　ばさりばさり　こう　掘る　うちに横の　ほうが　崩れてはね。　素人は　恐ろしくて。　それは　やれは　しないけど。 |
| 184 | A | アリャー　ナン。 | あれは　（ナン）。 |
| 185 | B | マー　アレワ　マー　ユーガ　ヨー　ホッタ　コトイナ。 | （まあ）　あれは　（まあ）　言うが　よく　掘った　ものよね。 |
| 186 | A | ナンボー　ホッテモ　エーソ。　クヤー　セン。 | いくら　掘っても　いいんだ。　崩れはしない。 |
| 187 | B | ホンート　ヒトリデ　**ホッタホゾナ**。　アレオ。 | ほんとうに　ひとりで　**掘ったのよね**。あれを。 |
| 188 | A | ウン。　クヤー　センイナ。 | うん。　崩れは　しないよね。 |
| 189 | B | マー　フンート。 | まあ　ほんと。 |
| 190 | A | ｛笑｝。 | ｛笑｝。 |

さらに187行でそれを繰り返す。185行目の評価の副詞「ヨー（よく）」や187行目の繰り返しから，これはBの「発見」と同時に「驚き」を表していると考えられる。この発話は聞き手への持ちかけ度が強いと考えられる。ここで文末詞ホが用いられている。

次の２例は話し手の聞き手への持ちかけ度が低いものである。

断片3は話者Bの井戸水を濾過するのに棕櫚の皮を手に入れないといけないという話を語る場面である。90-92行目で話者Aは息子に棕櫚の木に登って皮を剥いでやるように指示したが，94-96行目でそれは面倒だから木ごと倒せという話になったという。

**断片3**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 90 | A | ウチノ　ムスコエナ。　ウチノ　ムスカー　ミガカルイカラ。　オマエ　ノボッテカラ　ヘージャゲーッテ。 | うちの　息子へね。　うちの　息子は　身が　軽いから。　おまえ　登って　はいであげろと。 |
| 91 | B | マー。 | まあ。 |
| 92 | A | **イーヨッタソエナ**。 | **言っていたんだよ**。 |
| 93 | B | ホー。 | ほう。 |
| 94 | A | トコロガ　ヘグソワ　メンドークサーカラナ。 | ところが　はぐのは　めんどうくさいからね。 |
| 95 | B | ンー。 | うん。 |
| 96 | A | イッソ　ハー　ネモトカラ　ヒキタオセーテ。｛笑｝。 | いっそのこと　もう　根元から　引き倒せと。　｛笑｝。 |
| 97 | B | ｛笑｝ | ｛笑｝ |
| 98 | B | マー　ソレジャッタカナ。 | まあ　そうだったかな。 |

前者（90-92行目）の内容は一まとまりの事態の一部分（過程）であり，後者（94-96行目）の内容（結果）と合わせて一まとまりの事態が構成されている。このことを考えると，一まとまりの事態の一部分（過程）だけの提示は聞き手への持ちかけ度が弱いと考えられる。ここで文末詞ソが用いられている。

断片4は話者Bの長男が井戸を掘る場所について話者Aに相談を持ちかけた場面である。まずAがB宅へ行くことになったことが22-23-25-26行目で語られる。

**断片4**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 22 | A | チョット　テマー　トリャー　エート　オモーチョルッテ | ちょっと　時間を　もらえれば　いいと思っている」と |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 23 | A | ユーカラ。 | 言うから。 |
| 24 | B | フンー。 | ふん。 |
| 25 | A | マ　ナンデモー | 「まあ　なんにしても |
| 26 | A | オウチニ　イカンニャー　イケン。　イコーエーテ。　デ　**イッタソイナ**。 | お宅に　行かないと　だめだ。　行こうよ」と。　それで　**行ったんだよね**。 |
| 27 | B | ハー　ハー。 | はあ　はあ。 |
| 28 | A | ヘテ　アンタガター　アノー | そしたら　あなたがたは　あの |
| 29 | A | スイジバノ。 | 炊事場の。 |
| 30 | B | ソー　ソー。 | そう　そう。 |
| 31 | A | チカクガ　エーッテ　ユーテ。　ヘカラ　X1 チャンワ　アスコノ　カミノ　ホーガ　エーッテユー。 | 近くが　いいと　言って。　それから　X1 ちゃんは　あそこの　上手の　ほうが　いいと　言う。 |

本題は井戸を掘る場所について A がアドバイスすることなので，そのこと（26 行目）はその前段階の過程であり，一まとまりの事態の一部分である。27 行目の B の相槌からもこれは A の語りの途中であることが確認できる。したがってこの発話は相手への持ちかけ度が弱い。ここで文末詞ソが用いられている。

以上，情報の伝達に関しても聞き手への持ちかけの度合いには強弱があるという現象を確認した。次節以下では，持ちかけ度の弱い，一まとまりの事態の部分的提示の発話につく文末詞と持ちかけの度の強い提示の発話につく文末詞を観察，考察することにする[4]。

## 3　一まとまりの事態の部分的提示

ここでは一まとまりの事態の一部分を提示するときに用いられる文末詞について考察する。一まとまりの事態の一部分は，過程の部分と結果の部分に分けられ，いずれの場合も文末詞ソが用いられることを確認する[5]。

### 3.1　一まとまりの事態の過程の提示

一まとまりの事態を構成する事態は動態的なものと精神的活動に分けられる。動態的な事態によって展開される一まとまりの事態は個別の事態の連続体である。一方，精神的活動は根拠から結論を得るための思考あるいは判断の活動であり，活動自体は瞬時に起こるが，根拠と結論は一まとまり（或いは一組）の事態と考える。

正確には，前者を動態的事態からなる一まとまりの事態とするならば，後者は精神的活動を構成する一まとまりの事態となろうかと思うが，単純化して前者を「一まとまりの動態的事態」，後者を「精神活動」と呼び，両者を合わせたものを総称的に「一まとまりの事態」と呼ぶことにする。

#### 3.1.1　一まとまりの動態的事態の過程

まず一まとまりの動態的事態を観察する。断片 5 は箱苗（箱の中で育てた稲の苗）をする場合は田植えの 25 日前に箱に籾を蒔くのが理想的であるが，この年は降雨量が少なく 35 日も 40 日も待たなければ田植えができなかったため，根元が老朽化し黄色くなったこと，そんなときには田植えの 3 日前に尿素水を少し掛けた上で田植えをすると田で養分が効い

てくるから根付くといった一まとまりの事態を話者 A が話者 B に対して説明する場面である。

**断片 5**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 449 | A | ネッシンニ　ヤル　モノワー　ナニーナー。　アノ　サンジューゴンチモ　シジューニチモ　タッタヨーナ　ナェエワ | 熱心に　する　者は　なんだね。　（あの）　三十五日も　四十日も　経ったような　苗は |
| 450 | A | ネモトガ　ハー　ローキューカ　シチョルカラナ。 | 根元が　もう　老朽化　しているからね。 |
| 451 | B | ホー。 | ほう。 |
| 452 | A | ホェデー　ニョーソノナ。　ニョーソー　ヒトハコデナー。 | それで　尿素のね。　尿素を　一箱でね。 |
| 453 | B | フン。 | ふん。 |
| 454 | A | イチグラムッテ　ユーカラ　ワズカナ　モンジャケー。 | 一グラムと　いうから　わずかな　ものだから。 |
| 455 | B | ホー。 | ほう。 |
| 456 | A | ソレオナー | それをね |
| 457 | A | アノー。 | （あの）。 |
| 458 | B | ンー。 | うん。 |
| 459 | A | カケテ。 | かけて。 |
| 460 | B | ンー。 | うん。 |
| 461 | A | ヘテ | そして |
| 462 | A | タウエー　ミッカマェエニナ。 | 田植の　三日前にね。 |
| 463 | A | ニョーソミズ　**カケチョクソ**。 | 尿素水を　**かけておくんだ**。 |
| 464 | B | ハー　ハー　ハー　ハー。 | はあ　はあ　はあ　はあ。 |
| 465 | B | ナルホド。 | なるほど。 |
| 466 | A | <u>ヘテ</u>　ソリョ　タエ　ウエルトナー。 | <u>そして</u>　それを　田へ　植えるとね。 |
| 467 | B | フーン。 | ふうん。 |
| 468 | A | ア　マー　アノ　ハコノ　ナカデ　イロメガ　デン　ウチーナ。　タエ　ウツス。 | あ　まあ　あの　箱の　中で　苗が黄色くならない　うちにね。　田へ　移す。 |
| 469 | B | ハー。 | はあ。 |

462-463 行目の「（三日前に）尿素水を掛ける」ことはその一まとまりの事態の一部分であり，「苗が田で根付く」（結果）までの一過程である。ここに文末詞ソが用いられている。464-465 行目の B の発話は A の発話を遮らない相槌であり， A が 466 行目の順接接続詞「へて（そして）」を用いて話を続けることからも，この発話は一まとまりの事態の一過程であることが確認できる。

次の断片 6 も同様である。話者 A，B，C 三人が昔話を語る。全体として昔は土を掘り起こすのに牛に馬鍬という道具をつけて鋤くことによって田畑に植え付けられるようにしたという一まとまりの事態が語られる。ここは話者 B が話題提供者である。

**断片 6**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 980 | B | ウシー　ヒッパラシテ　ズーット。 | 牛に　引っ張らせて　ずっと。 |
| 981 | B | ソシタラー。 | そうすると。 |
| 982 | A | ウシー　ヒッパラシテナー　**オサエルソ**。　イッショケンメー　ヒッシニ　ナッテ　オサエル。 | 牛に　引っ張らせてね　**押さえるんだ**。　一生懸命に　必死に　なって　押さえる。 |
| 983 | B | ハー | はあ |
| 984 | B | <u>ソシタラ</u>　ツチガ　ヤワラカニ　コモー　ナルワケイナー。 | <u>すると</u>　土が　柔らかく　細かく　なるわけよね。 |
| 985 | C | ソレー。 | そう。 |
| 986 | B | マー　ホンー。 | まあ　ほんとうに。 |

982 行目で A は B の発話を先取りし割り込む。おそらく 980 行目の B の発話が単に「牛に引っ張らせる」だけのように聞こえ，A にとってはそんな楽な作業ではなく，「人が馬鍬を抑える」という過程が重労働であることを指摘したかったのだろう。ここで文末詞ソが用いられている。983 行目で B は発話権を取り戻し，A による指摘を認め，984 行目で順接接続詞「ソシタラ（すると）」でその結果を提示している。

部分的な過程の提示の後には順接だけでなく，断片 7 のように逆接の接続詞も後続しうる。ここは昔は落差を考慮して井戸の位置を決めたが，今は機械が発達したため，下手からでも水をあげることが可能であるという一まとまりの事態について話者 A が語る場面である。

**断片 7**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 60 | A | ムカシワ　ラクサデナ。 | 昔は　落差でな。 |
| 61 | B | ンー。 | うん。 |
| 62 | A | コンニャー　ドーモ　グアイガ　ワルイ。　ミズワ　ラクサデ　コンニャー　ドーモ　グアイガ　ワルイ　チュー　イツモ　カンネンデ　**オッタソイナ**。 | 水が流れて来ないと　どうも　ぐあいが悪い。　水は　落差で　来ないと　どうもぐあいが　悪い　という　いつも　考えで**いたんだよね**。 |
| 63 | B | ウーン。 | うん。 |
| 64 | A | ガ　サイキンー　アー　シテ　マー　キカェエガ　ハッタツ　シタカラナ。 | だが　最近　ああ　して　まあ　機械が発達　したからね。 |
| 65 | B | ウーン。 | うん。 |
| 66 | A | ハールカ　シタジノ　ホーカラデモナ。　ドンドン　ミズガ　アゲラレルカラ。 | はるか　下手の　ほうからでもね。　どんどん　水が　上げられるから。 |
| 67 | B | ハー。 | はあ。 |

62 行目の A の昔の仕方を提示する発話に文末詞ソが用いられている。最近の事情は昔の事情を経て成り立つものであるから，これを過程と見なすことに異論はなかろう。そして，63 行目で B が相槌を打ち， 64 行目で A は逆接の接続詞を用いて，最近の事情を続ける。

これまでの例は一まとまりの事態の過程が結果に先行するが，結果の方を先に述べる場合もある。断片 8 は田植えをする前に何回土を掘り起こすかということについて話者 A，B，C 三人が語り合う場面である。

**断片 8**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1135 | B | ハー　ホンナー　ヨンベン　ハイランニャー　タガ　ウエラレン。 | はあ　それなら　四回　入らねば　田が植えられない。 |
| 1136 | C | ハー　ソレガ　シアゲ。　マー　シゴヘングラェエ。 | はあ　それが　仕上げ。　まあ　四五回くらい。 |
| 1137 | B | マー　ゴヘンカナ。 | まあ　五回かな。 |
| （中略） | | | |
| 1142 | A | イヤ　イヤ。　アノナー。　ミズモチノ　ワルイタワナー。　アノー　ネンオ　エレテ　ヤル　トコロワナー。 | いや　いや。　あのな。　水持ちの　悪い田はね。　あの　念を　入れて　やる　所はね。 |
| 1143 | B | アラ　マ。 | あら　まあ。 |
| 1144 | A | ナカズクリ　チュー　コトー　**ヤルソイ**。　モーイッペン。　ウン。 | 中作り　という　ことを　**やるんだよ**。もう　一度。　うん。 |
| 1145 | C | ウン。 | うん。 |

話題はこの断片の前にも何度も触れられる最終的に「田植えをする」ことであり，このことが一まとまりの事態の結果である。A は 1142-1143 行でその過程で「中作り」ということをする場所があることを指摘する。ここで文末詞ソが用いられている。

以上，一まとまりの事態の過程を部分的に提示するときに文末詞ソが用いられることを確認した。

### 3.1.2　精神的活動の過程

精神的活動，つまり思考や判断にもその過程と結果がある。それぞれ根拠とそれを基に推論した結論である。ここでは根拠を表す発話の文末詞を考察する。

対象としたデータには文末詞が用いられた発話が根拠を表し，かつ結論が明示的に示される断片は観察されなかったが，わざわざ結論を言わない，結論を暗示する文脈で根拠を示す発話に用いられる文末詞は観察された。

断片 9 は話者 A がどこであろうが水が出るところを掘らないといけないということを根拠に B の孫が井戸を掘り当てたことを評価判断する一節である。

**断片 9**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 68 | A | ドコデモ　カシコデモ　ミズノ　デル　トコロオホランニャーナー。 | どこでも　かしこでも　水の　出る　ところを　掘らないとね。 |
| 69 | B | ウーン。 | うん。 |
| 70 | A | **イケンソェエ**。 | **いけないんだよ**。 |
| 71 | B | ナー。 | なあ。 |
| 72 | A | ホェデ　ナンジャローガナー。　マー　ソー　ソー　シテカラ | それで　なんだろうがな。　まあ　そう　そう　して |
| 73 | A | マー　アソコエ　チーット　ハー | まあ　あそこへ　ちょっと　もう |
| 74 | A | ブルデ　ホリカケチョル　チュオーガナ。 | ブルドーザーで　掘りかけている　と言うんだよね。 |
| （中略） | | | |
| 108 | A | ヘテー　マー　アンタガ　シッチョッテノ　ヨーニ | そして　まあ　あなたが　知っていらっしゃる　ように |
| 109 | A | X2 チャンガ | X2 ちゃんが |
| 110 | A | ホリアゲタホイナー。 | 掘りあげたんだよね。 |
| 111 | B | ウン。 | うん。 |

109-110 行目の「B の孫が井戸を掘り当てた」ことに対する A の評価は明示的には示されていないが肯定的である。それは 68-70 行目の「井戸掘りは水が出るところを掘らなければならない」という根拠とそれを実現したという事実から容易に推論できる。このとき文末詞ソが用いられている。このように一般的な原則や大前提が根拠となる場合は結果が明示されない場合が多いようである。

次の断片 10 も一般的な原則が根拠となる例である。これは B 氏の孫が掘り当てた井戸は家から離れたところにあるから，B 氏が 124 行目で「井戸水は夏は暖かくなり，冬は冷たくなる」と言ったのに対して，A 氏は 126 行目で一般論として「井戸水は夏は冷たく，冬は暖かい」と否定的意見を述べる一節である。

**断片 10**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 121 | B | ヘデ　マー　ケッキョクワ　マー　アンタモー | それで　まあ　結局は　まあ　あなたにも |
| 122 | B | オー　ミテ　モローテ　マー　アノ　ホンナラデルト　ユー　コトデ。 | （おお）　見て　もらって　まあ　あのそれなら　出ると　いう　ことで。 |
| 123 | B | ホンナラ　ハー　ホンナラ　ショーガナー。 | それなら　もう　それなら　しかたがない。 |
| 124 | B | ナツァー　アノー　ヌクイ　ミズ。　ヒヤーンフユワ　ヒヤー　ミズッテ。 | 夏は　あの　温かい　水。　（ヒヤーン）冬は　冷たい　水ということで。 |
| 125 | B | トーローッテ　ユー　マー　ハー　ケッシン　シタカラナ。 | 通ろうと　いう　まあ　はあ　決心を　したからね。 |
| 126 | A | ナツワ　アノー　ヌ　ヒヤイ　ミズ。　フユワヌクイ　ミズー　**ナルソイ**。 | 夏は　（あの）　（ヌ）　冷たい　水。冬は　温かい　水に　**なるんだよ**。 |
| 127 | A | ンー。 | うん。 |
| 128 | B | ｛笑｝　ソリャー　ソレジャケド。　ソレワ　ワカッチョルケド　キョリガ　トイーワーナ。 | ｛笑｝　それは　そうだけど。　それはわかっているけど　距離が　遠いよね。 |

即ち A の一般論を根拠とした発話は暗示的に B の言及を否定する結果になる。ここでも一般論を語る発話には文末詞ソが用いられている。

以上，精神的活動の過程を部分的に提示するときに文末詞ソが用いられ，その結果は明示的に示されない場合が多いことを確認した。

### 3.2　一まとまりの事態の結果の提示

一まとまりの事態を構成する段階的な事態は動態的なものと精神的活動に分けられる。ここでは「一まとまりの事態」を「一まとまりの動態的事態」と「精神活動」に分け，結果部分の文末詞について考察する。

#### 3.2.1　一まとまりの動態的事態の結果

既に一まとまりの動態的事態の過程部分の発話には文末詞ソが用いられることを確認したが，ここではその結果部分に用いられる文末詞を考察する。

断片 11 は話者 B の孫が話者 A に井戸の深さについての質問し，A が十分だと答える一節である。

**断片 11**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 159 | A | オイサン　モー　エカローカェエ。 | 「おじさん　もう　いいだろうか」。 |
| 160 | A | エーッチャー。 | 「いいってば」。 |
| 161 | A | オレ　マタ　ナカ　ハェエテ　ミル　ユーテ　ハェエテ　ミタ　トコロガ。 | 「俺が（マタ）　中に　入って　みる」と言って　入って　みた　ところが。 |
| 162 | B | ンー　ンー。 | うん　うん。 |
| 163 | A | エー　ヤキガ　デテナー。　ミズガ　デョーガナ。　ドンドン　ドンドン。 | いい　土の層が　出てね。　水が　出ているんだよ。　どんどん　どんどん。 |
| 164 | B | ホー。 | ほう。 |
| 165 | A | マー　コレカラ　ウヤー　ナンボ　ホッタッテノ。　イガワガ　ヨケー　イルダケ　ソンデヤッテ　**ユーソ**。 | まあ　これから　上は　いくら　掘ったってね。　井戸の内側の囲いが　たくさんいるだけ　損だよと　**言ったんだ**。 |
| 166 | A | ジューブン　ミズガ　アルカラ　ヤメーッテ　ユーテ。 | 十分　水が　あるから　やめろと　言って。 |
| 167 | B | アノー　ソコワ　ドネー　ナッチョッタホカナー。　アン　ギダギダ　スルー。 | あの　底は　どのように　なっていたのかな。　あの　ぎとぎと　する。 |

159-160-161-163 行目は A が「話者 B の孫が掘った穴に入ってみると土の層から水が出ていた」のを確認し，165 行目で結果的に「これ以上掘ると損をすると言った」ということである。ここでは一まとまりの動態的事態の結果の発話に文末詞ソが用いられている。

断片 12 は話者 B の長男の井戸の囲いの処理の仕方が気に入らないという話者 A が本来の処理の仕方を説明する場面である。

**断片 12**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 319 | A | イケンソ。　アリャー　タタキツチデナ。 | だめなんだ。　あれは　たたき土でね。 |
| 320 | B | ハー　ハー。 | はあ　はあ。 |
| 321 | A | アノ　アノ　アカドロト | あの　あの　赤泥と |
| 322 | A | イシバェト　セメントー　マゼテナー。 | 石灰と　セメントを　混ぜてな。 |
| 323 | B | フーン | ふうん |
| 324 | B | ハー。 | はあ。 |
| 325 | A | コー　ダンゴノ　ヨーナ　モノ　コサエテカラ　アェ　アェエダ　ヤ　コー　ヤッチョエテナ。　ピシャート　ヤッテカラ。　ウエ | こう　だんごの　ような　ものを　作って　（アェ）　間を　（ヤ）　こう　やっておいてね。　ピタッと　やってから。　上 |
| 326 | A | アノー　ナカモ　ソトガワモ　ミナ　**ヌリコムソ**。　＊＊＊ | （あの）　中も　外側も　みな　**塗りこむんだ**。　＊＊＊ |

319-321-322-325 行目のように本来は「井戸の囲いの接着としてたたき土，赤泥，石灰とセメントを混ぜて団子を作っておい」て，最後の行程として 326 行目のように「中と外に塗り込む」のだと A は言う。ここでも一まとまりの動態的事態の結果の発話に文末詞ソが用いられている。

以上，一まとまりの動態的事態の結果の発話には文末詞ソが用いられることを確認した。

### 3.2.2　精神的活動の結果

精神活動はある根拠や原因からある結論や判断結果を得る活動である。

断片 14 は話者 B の孫が掘った穴に話者 A が入ると，十分な水が出てきていることを確認した場面である。

**断片 13**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 171 | A | チョット　イヤ　イワジャナー。　ヤケタナー。 | （ちょっと）　いや　岩ではない。　焼けたような。 |
| 172 | B | ンー。 | うん。 |
| 173 | A | ソーガ　コー　デチョッタホ。 | 層が　こう　出ていたんだ。 |
| 174 | B | ホー。 | ほう。 |
| 175 | A | ソレカラ　プッププップ　デルイ。　ミズガー。 | そこから　ピュッピュピュッピュ　出るんだよ。　水が。 |
| 176 | B | ホー。 | ほう。 |
| 177 | A | ウーン。 | うん。 |
| 178 | A | アノ　ソーガ　デタラ　モットモ　**エーソエナ**。 | あの　層が　でたら　いちばん　**いいんだよね**。 |
| 179 | B | アー。　ソレカナー。 | ああ。　そうなの。 |

A の「十分な水が出る層であればそれは井戸に最適である」といった前提を元にして 175 行目の根拠から判断した結果が 178 行目である。ここでは文末詞ソが用いられている。179 行目の B の反応からもこれが判断結果であることが確認できる。

断片 14 は話者 B の長男が行った井戸の内側の処置に対して話者 A が否定的な判断を下す場面である。

**断片 14**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 314 | B | ハー。　ソーカナー。　ハー　ハー。　ツイダツナェエデナー。　タダー　アノ　カサネテ　ヌッタダケ。 | はあ。　そうなの。　はあ　はあ。　継いだ　繋いでね。　ただ　あの　重ねて　塗っただけ。 |
| 315 | A | ハー。 | はあ。 |
| 316 | A | ウンー。　イケンイ | うん。　だめだよ |
| 317 | A | **イケンソー**。　アレジャー。 | **だめなんだ**。　あれでは。 |
| 318 | B | ハー　アレジャー　ヤッポ　イケンジャロ。 | はあ　あれでは　やはり　だめだろう。 |
| 319 | A | **イケンソ**。　アリャー　タタキツチデナ。 | **だめなんだ**。　あれは　たたき土でね。 |
| 320 | B | ハー　ハー。 | はあ　はあ。 |

A の「井戸に濾過装置を設ければいい井戸になる」といった前提を元にして 314 行目で B が言ったような不十分な作り方に対して，316-317 行目で A が否定的な評価判断を下す。ここでは文末詞ソが用いられ，318 行目で否定的評価は繰り返される。320 行目で B が A のそれを受けて納得するところからもそれが判断の結果であることが確認できる。

以上，精神的活動の結果を提示するときに末詞ソが用いられることを確認した。

### 3.3 ソジャ

文末詞ソにコピュラのジャが接続する形式は本データの中では 4 例であった。いずれも男性話者 A と C の発話である。少ない用例数で断定はできないので，男性による使用が多いとの指摘に留めておく。

同様に断定はできないが，全てのソジャは一まとまりの動態的事態の結果を表すものである。例えば，断片 15 では話者 A が過去の井戸堀の仕事で体験した恐ろしい出来事を語る。

**断片 15**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 288 | A | ハー。　ヤッポー　サカヤノ　イドドモヤッタラ | はあ。　やはり　栄屋の　井戸などなら |
| 289 | A | ヒーテー　フツカ　チョット　ソノ　アメガ　フッテナー。　シゴトー　セダッタエー。 | 一日か　二日か　ちょっと　（その）　雨が　降ってね。　仕事を　しなかったよ。 |
| 290 | A | ヘテ。　サー　イガワ　イレルデヨッテ　ユータトキニャー　アンター　バタバタ　ヘリガ　カベミナ　**クエルソジャ**。 | そして。　「さあ　井戸の内側の囲いを入れるよ」と　言った　ときには　（あなた）　バタバタと　縁が　壁が　みんな**崩れるんだ**。 |
| 291 | B | フーン。 | ふうん。 |
| 292 | A | ヤッパ　オソロシーイナー。 | やはり　恐ろしいよね。 |
| 293 | B | フーン。 | ふうん。 |

289 行目で「雨降りで仕事をしなかった」という過程，290 行目で「井戸の囲いをしようとした」という過程が述べられ，同じ行でその結果「壁が崩れてきた」という恐ろしい結果が述べられる。ここに文末詞ソが用いられている。

断片 16 は話者 A が箱苗の欠点の一つを挙げる場面である。

**断片 16**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 507 | A | ウエタオ　コサエテモジャナー。 | 植田を　作ってもだね。 |
| 508 | B | ンー。 | うん。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 509 | A | コーウンキデ　グルグルグルグル　マゼクルカラ。 | 耕運機で　ぐるぐるぐるぐる　かき混ぜるから。 |
| 510 | A | スグ　マゼクッテ　アクルヒー　ウエル　チューコター　**デキンソジャー**。 | すぐ　かき混ぜて　翌日に　植える　という　ことは　**できないんだ**。 |
| 511 | B | ホー。 | ほう。 |
| 512 | A | タウエキガ　ウマッテナー。 | 田植機が　埋まってね。 |

507-509 行目で A は「田植えの準備が整った田を作っても耕運機で掘り混ぜる」ことが原因となること，510-512 行目でその結果「翌日は田植機が埋まって田植えができない」ことを述べる。ここでも結果の発話に文末詞ソジャが用いられている。

以上，文末詞ソジャは一まとまりの動態的事態の結果を提示するときに用いられることを確認した。

### 3.4　ソカ

文末詞ソに疑問の助詞のカが接続する形式は本データの中では２例であった。話者は男性 A と女性 B の発話であることから，この形式は性別に関係なく使用されるものだと考えられる。

用例数の少なさから断定はできないが，いずれのソカも一まとまりの動態的事態の結果に対して疑問を表すものである。

断片 17 は話者 A が息子夫婦に対して「自分が死んだら消毒の仕方も知らないでどうするのか」と説教したことを話者 B に打ち明ける場面である。

**断片 17**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 697 | B | ソエジャカラ　モー　コリャー　モ　ヨイヨージダェエノ。 | それだから　もう　これは　もう　いよいよ　時代の。 |
| 698 | A | ワタシャー　ホャカラ　オレガ　シンダラ　オマエタチャー　ドネー　**ナルソカ**ーテ。　カーイ | 私は　だから　「俺が　死んだら　おまえたちは　どう　**なるのか**」と。　まったく |
| 699 | A | タネノ　ショードクノ　ホーホーモ　シッチャーオラン。　ケーサンデ　ワリダサンニャー　マーイケンソヤガ　ナニカー。 | 種の　消毒の　方法も　知っては　いない。　計算で　割り出さないと　（まあ）いけないんだが　「何かい。 |
| 700 | A | オマエタチャ　エー　ダェエショー　オボエーヨー。　イツ　シヌヤラ　シランド。　オリャーッテ　ワシャー　ユーチャール。　｛笑｝　ハー。 | おまえたちは　ええ　少しは　覚えろよ。　いつ　死ぬやら　知らんぞ。　俺は」と　俺は　言ってある。　｛笑｝　はあ。 |
| 701 | B | ソリャー　アンター　チャット　ニッキデモ　アンター　ノコシテ　オオキーナ。 | それは　（あなた）　ちゃんと　日記でも　（あなた）　残して　おきなさいな。 |

699 行目の「息子夫婦は籾の消毒の仕方も知らない」ということが一まとまりの事態の過程であり，A は彼らに 698 行目で「そんなことで自分の死後はどうなるか」と疑問を呈したことが述べられる。ここで一まとまりの動態的事態の結果の発話に文末詞ソが用いられている。

断片 18 は話者 A，B，C が田植えをする前に耕運機で何回耕すのかという話をしている場面である。

**断片 18**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1181 | C | コノー　オキダヘンワー | この　沖田あたりは |
| 1182 | C | イッカイデ　ヤッテ　シマウンジャカラ。 | 一回で　やって　しまうんだから。 |
| 1183 | B | ンマー。 | まあ。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1184 | C | イッカイニ　タテヨコ　カーテ　ヤッテ　シマウ。 | 一回に　縦横を　掻いて　やって　しまう。 |
| 1185 | B | ソレデ　**ウエルソカナ**。 | それで　**植えるのかな**。 |
| 1186 | C | アー。 | ああ。 |
| 1187 | B | へー。 | へえ。 |

1181-1182-1184 行目で C が「沖田では耕運機は一回だけだ」と述べるが，それは一まとまりの動態的事態の過程と見なされる。それに対して，1185 行目で B は「それで田植えをするのか」と問う。これはその結果に対する疑問であり，文末詞ソが用いられている。

以上，一まとまりの事態の結果に対して疑問を提示するときには文末詞ソカが用いられることを確認した。

## 4　聞き手への持ちかけ

話し手が発見し驚いたことを聞き手に伝えたり，自慢したり，聞き手が認識していないことを伝えたりするとき，話し手の聞き手への持ちかけ度合いは強い。ここではそのときの文末詞について考察する[6]。

### 4.1　発見による驚き

話し手の眼前に現れた予期せぬ物事は，意外性を伴いながら聞き手に伝達されると考えられる。

断片 19 は熟練の話者 A の監督のもとで話者 B の孫が井戸を掘っているとき，井戸を掘り当てたことを語る場面である。

**断片 19**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 103 | A | ホンナラー　マー　ソネー　スルカナ　チューカラ。　オー　ホイデ　マー　トニカク | それなら　まあ　そのように　するかなと言うから。　おう　それで　まあ　とにかく |
| 104 | A | マー　ホルダケ　ホッテ　ミート。 | まあ　掘るだけ　掘って　みろと。 |
| 105 | B | ンー。 | うん。 |
| 106 | A | ユー　コトヤト。 | いう　ことだった。 |
| 107 | B | ハー　ハー。 | はあ　はあ。 |
| 108 | A | ヘテー　マー　アンタガ　シッチョッテノ　ヨーニ | そして　まあ　あなたが　知っていらっしゃる　ように |
| 109 | A | X2 チャンガ | X2 ちゃんが |
| 110 | A | **ホリアゲタホイナー**。 | **掘りあげたんだよね**。 |
| 111 | B | ウン。 | うん。 |
| 112 | A | ウーン。 | うん。 |

108-109-110 行目の事態は一まとまりの事態の結果であるので，文末詞ソあるいはソジャ（以降，文末詞「ソ系統」）が用いられる可能性があると思われる。ここで文末詞ホが用いられているのは，A はその現場で驚きを持って B の孫が掘り当てたのを目撃したことが表されているからであろう。それゆえソ系統に優先して文末詞ホが用いられていると考えられる。このことは 112 行目の A の念押しからも聞き手への持ちかけ度が強いことが確認できる。

断片 20 は話者 B の孫が掘った底の様子を穴の中に入って見た話者 A に尋ねる場面である。

**断片 20**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 167 | B | アノー　ソコワ　ドネー　ナッチョッタホカナー。　アン　ギダギダ　スルー。 | あの　底は　どのように　なっていたのかな。　あの　ぎとぎと　する。 |
| 168 | A | イヤ　アノー。 | いや　（あの）。 |
| 169 | B | アノ　ツチジャッタホ。 | あの　土だったの。 |
| 170 | B | イワジャッタカナ。 | 岩だったかな。 |
| 171 | A | チョット　イヤ　イワジャナー。　ヤケタナー。 | （ちょっと）　いや　岩ではない。　焼けたような。 |
| 172 | B | ンー。 | うん。 |
| 173 | A | ソーガ　コー　**デチョッタホ**。 | 層が　こう　**出ていたんだ**。 |
| 174 | B | ホー。 | ほう。 |

167-169 行目で B が井戸の底の様子を尋ね，171-173 行目で A が答える。ここで A は現場で直接発見したことを述べ，そこに文末詞ホが用いられている。一まとまりの事態としてこれを考えると，「穴に入って底を見る」ことが過程，「焼けたような層が出ている」ことが（認識）結果となり，文末詞ソ系列が用いられる可能性があると思われるが，174 行目の B の新事実を認めるような反応を考えると，この発話は聞き手への持ちかけ度が強いものであると考えられる。

以上，発見による驚きを表すときには文末詞ホが用いられることを確認した。

## 4.2　自慢による強調

話し手が聞き手に話す自慢は強調されて聞き手に伝達されると考えられる。

断片 21 は干ばつで稲田が干からびたときに話者 B が井戸からホース伝いで水を流し入れたことを語る場面である。

**断片 21**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 240 | B | ソレグライジャカラ　コナイダー　アンター　カンバツジャローガナ。　コノー　コトシワ。 | それぐらいだから　この間　（あなた）干ばつだろう。　（この）　今年は。 |
| 241 | A | ハー。 | はあ。 |
| 242 | B | ホャカラ　アノー　ホース　コーテナ。 | だから　（あの）　ホースを　買ってね。 |
| （中略） | | | |
| 246 | B | ダェエオンノ　タエ　モッテ　イッテナ。 | 大音の　田へ　持って　いってね。 |
| 247 | A | オー。 | （おう）。 |
| 248 | B | アノー　ン　マ　ミトエ　モ　アノ　コノ　イデー　モッテ　イッテナ。 | （あの）　（うん）　（まあ）　田の排水口へ　（モ）　（あの）　この　田の用水のために川の水をせき止めた所へ　持っていってね。 |
| 249 | A | ウン。 | うん。 |
| 250 | B | アノ　ナガー　ホースデカラ　ミチノ　シタノ。 | （あの）　長い　ホースで　道の　下の。 |
| 251 | A | オ　オ。 | （オ）　（オ）。 |
| 252 | B | ヒワレチョル　ソエ　ドンドンドンドン　**アタシタホ**。 | ひびが入っている　ところへ　ドンドンドンドン　**渡したの**。 |
| 253 | A | オー。　ソレカナ。 | おう。　そうかな。 |
| 254 | B | ハー。　マー　コリャー　ホントニ。 | （はあ）。　（まあ）　これは　ほんとうに。 |

240-242-246-248 行目で「干ばつの折りホースを買って，それを田まで通した」ことが語られるが，これは一まとまりの事態の過程である。250-252 行目で「井戸から水を流し入れた」ことが述べられるが，これはその結果である。したがってソ系列（話者 B は女性なのでソジャは用いないと思われるが，男性ならソジャも）が用いられる可能性があると思われる。しかし，ここではそれに続く 253 行目の A の反応からこの事実は A にとって未知のことであったこと，254 行目の B のこの事実を強調しようという副詞「ホントニ」からこの発話は B の自慢であり，ソ系列より優先的に文末詞ホが用いられていると考えられる。

次の断片 22 も同様である。ここは話者 A の父が息子の負担を減らすため馬鍬の取り手を作ってくれたことを語る場面である。

**断片 22**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 962 | A | ホェデ　オヤジガナー。 | それで　親父がな。 |
| 963 | A | ダェエクモ　ヤリャー　コビキモ　ヤリヨッタカラ。 | 大工も　やれば　木挽きも　やっていたから。 |
| 964 | A | オレガ　コハェチャル　オマエ　チョード　エーソ　コハェチャルテ。 | 俺が　作ってやる　おまえに　ちょうどいいのを　作ってやると。 |
| 965 | B | フーン。 | ふん。 |
| 966 | A | ウエカラ　シタニー　オサエルヨーナ。 | 上から　下に　押さえるような。 |
| 967 | B | ハー　ハー　ハー。　ソレカナ。 | はあ　はあ　はあ。　そうなの。 |
| 968 | C | ハー　ハー　ソレカエ。 | はあ　はあ　そうか。 |
| 969 | A | アノー　トリテオ　ヒクー　スリャーナー。　ラクナ。　アネー　ヤッテ　コサエテ　クレヨッ**クレタホ**。 | あの　取り手を　低く　すればね。　楽だ。　そう　やって　作って　（クレヨッ）　**くれたんだ**。 |
| 970 | C | ンー。 | うん。 |
| 971 | A | ハー。 | はあ。 |

962-963-964-966-969 行目は「大工や木こりをしていた父が息子のために便利な道具を作ってやると言った」という過程と「父がそれを作ってくれた」という結果からなる。したがってその結果にはソ系列が現れる可能性があると思われる。しかし，971 行目の A の念押しからこれは自慢話であると考えられ，それゆえ文末詞ホが優先的に用いられていると考えられる。

以上，ここでは自慢を強調するときには文末詞ホが用いられることを確認した。

### 4.3　聞き手の未認識に対する強調

話し手は聞き手が認識していないと思うことは強調して伝達しようとすると考えられる。

断片 23 は話者 A が井戸掘りより難しい貯水タンク作りをしたことを話者 B に話す場面である。

**断片 23**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 327 | A | ヘーカラ　X3 ノー　ソコノ　X3 ノ　ケーシャノアノー　ソトガワノ　アノ | それから　X3 の　そこの　X3 の　鶏舎のあの　外側の　あの |
| 328 | A | オーキナ　タンクガ　アルイ。 | 大きな　タンクが　あるよ。 |
| 329 | B | ンー。 | んー。 |
| 330 | A | ソレモ　ワシガ　**ツイタホイナ**。 | それも　俺が　**築いたんだよね**。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 331 | B | ホー。 | ほう。 |
| 332 | A | ヒトッツモ　モリャー　セン。 | まったく　漏りは　しない。 |
| 333 | B | ハー。　ソレカナー。 | はあ。　そうなの。 |

ここは一まとまりの事態の過程と見なされる部分がなく，前の文脈もなく突如として語られるので，ソ系列は使いにくいと予測される。Aは328-330行目で「貯水タンクを作った」こと，332 行目で「それは水漏れしない」ことを知らない B に強調して伝えている。それは B による 331 行目の評価的な反応や 333 行目のそれまで認識していなかったゆえの反応から確認できる。なお，この発話は自慢としての解釈も成り立つ。

断片 24 は「箱苗」での田植えには欠点だけでなく長所もあるということを話者 A が話者 B に語る場面である。

**断片 24**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 588 | A | トコロガ　ハ　ハコナエノ　トクテンワナ。 | ところが　（ハ）　箱苗の　特典はね。 |
| 589 | B | ンー。 | うん。 |
| 590 | A | ケッキョク　ソノー　ナンデショー　オー　マー　ハタケーナエト　オナシヨーナ　モンジャカラ。 | 結局　その　何でしょう　（オー）　まあ　畑苗と　同じような　ものだから。 |
| 591 | B | フン。 | ふん。 |
| 592 | A | カッチャクガ　**ハヤーホエナー**。 | 根付くのが　**早いんだよね**。 |
| 593 | B | ハー。　ソージャロー。 | はあ。　そうでしょう。 |
| （中略） | | | |
| 600 | A | ウエツケタラ　ドンドンナー。 | 植え付けたら　どんどんね。 |
| （中略） | | | |
| 602 | A | アノー　カッチャクシテ　ブンケツ　スルカラ。 | あの　根付いて　枝分かれ　するから。 |
| 603 | A | タチマチ　アノー　オイツク。 | たちまち　あの　追いつく。 |
| 604 | B | ウン。　ハー。　ソージャロー。　ソージャロー。　ウン　ナルホド。 | うん。　はあ。　そうだろう。　そうだろう。　うん　なるほど。 |
| 605 | B | ウン。　ナルホド　＊＊＊ | うん。　なるほど　＊＊＊ |

ここではこの断片の前に短所が語られ，ここでその長所が述べられるので，内容的に一まとまりの事態として捉えにくい。したがってソ系列が用いにくいと予測される。590-592行目の A による長所についての発話に文末詞ホが用いられている。593 行目の B の予想通りだと言わんばかりの反応はおそらく A にとっては予想外だっただろう。ここは元々箱苗の仕方を知らない B が熟練の A に教わるという文脈だからである。その後の展開を観察してみると，602-603行目で「箱苗は根付くのが早いから植え付けたときは小さいが成長するスピードが速い」ことが語られる。それに対する B の反応は 604 行では初めは予想通りとの態度を示しながらも，605 行目に掛けて新たな認識の獲得であることを認める。以上のことから，やはり 592 行目では聞き手の未認識に対する強調として文末詞ホが用いられていると考えられる。

以上，聞き手の未認識に対して強調するときには文末詞ホが用いられることを確認した。

### 4.4　ホジャ

文末詞ホにコピュラのジャが接続する形式は本データの中では３例であった。いずれも男性話者 A と C の発話である。少ない用例数から断定はできないが，男性による使用が多いと予想される。このことは文末詞ソジャの特徴とも重なる。

全てのホジャは聞き手への持ちかけの強いものだと考えられる。

断片 25 は話者 A と話者 C が子供時代に経験した農作業の辛さを語る場面で，主に C が話を進めている。

**断片 25**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 878 | C | ソッチジャ　イケンテ　オークジョ　クライヨル。 | そっちでは　だめだと　大目玉を　食らっている。 |
| 879 | C | ホデ　ソノー　ヒトリワ　ウシロムキー　ナッチョッタ。 | それで　その　ひとりは　後ろ向きに　なっていた。 |
| 880 | C | ホテ　ポッタンポッタン　タタイタラ　モー | そして　ポッタンポッタン　たたくと　もう |
| 881 | C | サンジップンモ　ヤッタラ　モー　コレ。 | 三十分も　やると　もう　これ。 |
| 882 | C | テマメッテ　ユー　ヤツガ　ココノ　アノー　ユビー。 | 手豆と　いう　ものが　ここの　あの　指に。 |
| 883 | C | ココエ　デキテ。 | ここに　できて。 |
| 884 | C | ソノー　コレガ　モ　マッカッケー　ナッテナー。 | その　これが　もう　まっ赤に　なってな。 |
| 885 | A | ヒトツ。 | ひとつ。 |
| 886 | C | モ　イトーデ　ヤレンソジャー。 | もう　痛くて　我慢できないんだ。 |
| 887 | A | ヒトツ　イマー　キーチョリャーノー。 | ひとつ　今　聞いていればね。 |
| 888 | A | ヒトツホーカラ　タタクトジャナー。 | 一方から　たたくとだね。 |
| 889 | C | ウン。 | うん。 |
| 890 | B | ウン。 | うん。 |
| 891 | A | サンボンコーガ　**ガチアウホージャー**。 | 三本鍬が　**かちあうんだよ**。 |
| 892 | C | オー　ソレー。 | おう　そうだ。 |
| 893 | B | フーン。 | ふうん。 |
| 894 | A | ソラー　アブナーカラ。 | それは　危ないから。 |
| 895 | C | ウン。 | うん。 |
| 896 | A | カナラズ　ヒトリワ　ハンタイ　ムケトル。 | 必ず　ひとりは　反対を　向けている。 |
| 897 | C | アー。 | ああ。 |
| 898 | A | マー　コー　ユー　コトヤッタナー。 | まあ　こう　いう　ことだったな。 |

C は 878-879-880-881-882-883-884 行目で「三本鍬で土を叩く作業をすると手豆ができて辛かった。その作業は両側から一人が前向きもう一人が後ろ向きで叩いた」といったことを述べるが，A は 885 行目で C の語りに割り込もうとし，887-889 行目で発話権を B から奪い，891 行目で A はそうする原理は「同じ方向で二人が叩けば三本鍬がかち合うからだ」と説く。ここでは C の不十分な説明に対して A が必要な説明をつけ足す形で発話される。即ち，この発話は他の話者の発話権を取り，その発話を強調するようなもので，この文末詞ホは聞き手への持ちかけ度の極めて強いものであると言える。

断片 26 は話者 C が子供時代農作業の手伝いに駆り出された話を持ちかけ，それに関連した話として話者 A が自らの体験を持ち出すという場面である。

**断片 26**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 919 | C | ガッコーカラ　カエルト　ソノー　イッショーケンメー　マッチョルンジャ　ムカシノ　コトヤカラ。 | 学校から　帰ると　（その）　一生懸命待っているんだ　昔の　ことだから。 |
| （中略） | | | |
| 923 | C | ホィケー　アノー　モドッテ | だから　（あの）　帰って |
| 924 | C | デルト　ナルト　ワシドモァ　ソノー　タガ　チカイカラ。 | 出ると　なると　私などは　その　田が近いから。 |
| （中略） | | | |
| 927 | C | ソノー　トコロガ　アルカラ。 | そういった　所が　あるから。 |
| 928 | C | ガッコー　オエテ　コノ　コノ　マェエノ　ホーモ　ツクリヨッタシナー。 | 学校を　終えて　この　この　前の　ほうも　作っていたしな。 |
| 929 | B | ウーン。 | うん。 |
| 930 | C | ガッコーガ　イマ　ヒケタ　チューガ　ワカッチョルンジャ。 | 学校が　今　終わった　というのが　わかっているんだ。 |
| （中略） | | | |
| 934 | C | ホジャカラ　ソノー　ミチグサ　トッタラ　ソノー　バンニャー　マタ　カエッテ　シカリアゲル。 | だから　その　道草を　食ったら　その晩には　また　帰って　叱りとばす。 |
| 935 | C | ホャカラ　ソノー。 | だから　その。 |
| （中略） | | | |
| 937 | C | アー。　モー　ダェエブン　モー　イチジカンモマェエ　シモータソエ　ナニョ　ショルカ　チューヨーナ　コトデー。 | ああ。　「もう　だいぶん　もう　一時間も　前に　終わったのに　何を　しているんだ」　というような　ことで。 |
| 938 | A | オリャーノー。 | 俺の家はな。 |
| 939 | C | オー。 | おう。 |
| 940 | A | カエッテ　ミルトノー。 | 帰って　みるとね。 |
| 941 | A | チャント　カキオキガ　**シチャルホジャー**。 | ちゃんと　書き置きが　**してあるんだ**。 |
| 942 | B | {笑}。 | {笑}。 |
| 943 | C | {笑}。 | {笑}。 |
| 944 | A | ガッコーカラ　カイッタラ　ドコソコイ　コイテ　カキオキガ　シチャル。　アー。 | 学校から　帰ったら　どこそこに　来いと　書き置きが　してある。　ああ。 |
| 945 | B | アー　{笑}。 | ああ　{笑}。 |
| 946 | C | アー　ジャロー。 | ああ　だろう。 |
| 947 | C | {笑}。 | {笑}。 |

919-923-924-927-928-930-934-935-937 行目で C は「学校に近くに自分のうちの田があったから帰り道で寄り道すると親にすぐにバレて叱られた」といった体験を話す。その話に触発され A も自身の体験を披露する。C が 937 行目で自身の体験話を終結し始めたかと思われる「…ということで」と発するとすかさず A は 938 行目 で発話権を取り，940-941 行目で「学校から帰ったら自分の家は（指定の場所に来いという）書置きがしてあった」というエピソードを披露し始める。944 行目の書置きの発話によって 945 行目での B の笑い，947 行目での C の笑いを誘う。ここでは他者の発話権を奪いとり同種の体験で（さらに）衝撃的な話を披露するところで文末詞ホジャが用いられている。

断片 27 は三例中の最後の例である。これは話者 A が馬鍬を抑える作業が辛かったことを語る場面である。

**断片 27**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 955 | A | アレ　ワスレンガ　ナンジャノー。 | あれ　忘れないが　何だなあ。 |
| 956 | C | ンー　ンー　ンー。 | うん　うん　うん。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 957 | B | フーン　フーン。 | ふん　ふん。 |
| 958 | A | アノー　マグワエナ。　ミズ　トル　マグワ。アノ　マグワガ　ツイ　アノ　コータホジャーオレガ　チビジャカラ。 | あの　馬鍬よな。　水を　取る　馬鍬。あの　馬鍬が　ただ　あの　買ったものでは　俺が　チビだから。 |
| 959 | C | ウン。 | うん。 |
| 960 | A | **エラーホジャー**　タコーニ　コー　オサエニャイケンカラ。 | **つらいんだ**　高く　（こう）　押さえなければ　ならないから。 |
| 961 | B | ウーン。 | うん。 |

958-960 行目で A は「自分は背が低いから馬鍬を抑えるのが辛い」ことを打ち明ける。ここで文末詞ホジャが用いられているが，まさに「告白」といって言いものである。

ここでは文末詞ホジャは優位的に男性に用いられること，聞き手に対する持ちかけ度が極めて強いことを確認した。

### 4.5　ホカ

文末詞ホが疑問文として用いられるのは３例であった。話者は女性 B の発話のみであり，その中でホカの形式が２例，疑問の助詞カを伴わない例が１例である。この資料は男性話者 A，C が中心的に話をし，話者 B が聞き手に回るといった談話話資料であるので，男性話者が質問する場面がなかったと考えられ，男女に関わらず使用される形式だと考える。

断片 28 は話者 A が話者 B の家の者が掘った穴に入ってみたときの様子を語る場面である。

**断片 28**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 163 | A | エー　ヤキガ　デテナー。　ミズガ　デョーガナ。　ドンドン　ドンドン。 | いい　土の層が　出てね。　水が　出ているんだよ。　どんどん　どんどん。 |
| 164 | B | ホー。 | ほう。 |
| 165 | A | マー　コレカラ　ウヤー　ナンボ　ホッタッテノ。　イガワ〔24〕ガ　ヨケー　イルダケ　ソンデヤッテ　ユーソ。 | まあ　これから　上は　いくら　掘ったってね。　井戸の内側の囲いが　たくさんいるだけ　損だよと　言ったんだ。 |
| 166 | A | ジューブン　ミズガ　アルカラ　ヤメーッテ　ユーテ。 | 十分　水が　あるから　やめろと　言って。 |
| 167 | B | アノー　ソコワ　ドネー　**ナッチョッタホカナー**。　アン　ギダギダ　スルー。 | あの　底は　どのように　**なっていたのかな**。　あの　ぎとぎと　する。 |
| 168 | A | イヤ　アノー。 | いや　（あの）。 |
| 169 | B | アノ　**ツチジャッタホ**。 | あの　**土だったの**。 |
| 170 | B | イワジャッタカナ。 | 岩だったかな。 |
| 171 | A | チョット　イヤ　イワジャナー。　ヤケタナー。 | （ちょっと）　いや　岩ではない。　焼けたような。 |

163-165-166 行目で A が「穴に入ると水が出ていて，これ以上掘る必要はなかった」ことを語り終えるか終えないかというときに 167 行目で B が間髪入れず底の様子についての質問を投げつける。さらに 169 行目で「ギトギトする土だったのか」とさらに質問を投げつける。ここはホカの形ではなく，ホで疑問を表している。前にホジャによる割り込みあるいは相手の発話が終わるか終わらないかのタイミングでの発話権の取得について考察したが，ここは文末詞ホカによるやや強制的な発話権の取得が見られる。したがって，これは文末詞ホカによる強い質問の持ちかけと考える。

断片 29 は水持ちの悪い田ではどう土を耕すかということを話者 A が語る場面である。

**断片 29**

| | | |
|---|---|---|
| 1142A | イヤ　イヤ。　アノナー。　ミズモチノ　ワルイタワナー。　アノー　ネンオ　エレテ　ヤル　トコロワナー。 | いや　いや。　あのな。　水持ちの　悪い田はね。　あの　念を　入れて　やる　所はね。 |
| 1143B | アラ　マ。 | あら　まあ。 |
| 1144A | ナカズクリ　チュー　コトー　ヤルソイ。　モーイッペン。　ウン。 | 中作り　という　ことを　やるんだよ。もう　一度。　うん。 |
| 1145C | ウン。 | うん。 |
| 1146A | ホヤカラ　イッペン　シロズキオ　ヤッテヤナー。 | だから　一度　（代鋤）を　やってだね。 |
| 1147A | マタ　カクイナ　イチオー。 | また　掻くよね　一応。 |
| 1148C | ウーン。 | うん。 |
| 1149B | ホー。 | ほう。 |
| 1150A | カク　カーテ。 | （カク）　掻いて。 |
| 1151A | マタ　サラニ　ソノ　ウエオ　マタ　モー　イッペン　スクソジャー。 | また　さらに　その　上を　また　もう一度　鋤くんだ。 |
| 1152C | ウン。 | うん。 |
| 1153B | ホンナラ　ハナカラ　シマェエマデニ　ナンベン**ハイルホカナー**。 | そんなら　最初から　最後までに　何度**入るのかねえ**。 |
| 1154C | ソラ　マー　ゴヘングラェエ　ハイルナ。 | それは　まあ　五回くらいは　入るね。 |
| 1155C | ンー。 | うん。 |

1142-1144-1146-1147-1150-1151 行目で A は具体的な作業を説明する。その発話が終わりかけたかと思うとすぐさま 1153 行で B が質問を投げかける。ここもホカによる強い質問の持ちかけである。

以上，ここでは文末詞ホカは強い質問の持ちかけで用いられることを確認した。

## 5　振り返って文末詞ソとホについて

ここで改めて文末詞ソとホが用いられる発話を談話構造での働きから振り返ってみる。

文末詞ソは聞き手への持ちかけ度が弱く，一まとまりの事態の過程および結果を表す発話に用いられることを確認した。

一まとまりの動態的事態の過程については断片 3, 4, 5 そして 6 の発話に文末詞ソが用いられていることを確認した。過程的な段階がいくつかあるなかでも特筆すべき過程が文末詞ソによって強調されていることに注意を払われたい。

断片 5 を例にとって説明すると，「苗が田で根付く」までに「（三日前に）尿素水を掛ける」という過程が必要であり，その発話に文末詞ソが用いられているが，この過程は全ての過程の中で「特立」[7]したものである。次は断片 5 およびその後の話者 A の発話から関連する発話のみ抜き出したものである。

**断片 5 を改変して再掲**

| | | |
|---|---|---|
| 462 A | タウエー　ミッカマェエニナ。 | 田植の　三日前にね。 |
| 463 A | (a)ニョーソミズ　**カケチョクソ**。 | 尿素水を　**かけておくんだ**。 |
| 468 A | (b)ア　マー　アノ　ハコノ　ナカデ　イロメガデン　ウチーナ。　タエ　ウツス。 | あ　まあ　あの　箱の　中で　苗が黄色くならない　うちにね。　田へ　移す。 |
| 470 A | ホンデン　ウツスト　マー | 本田へ　移すと　まあ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 471 | A | タデ　ホンデンデ | 田で　本田で |
| 472 | A | (c)ヨーブンガ　キーテ　クルカラ。 | 養分が　効いて　くるから。 |
| 474 | A | (d)ズート　マー　カッチャク　スルト。 | ずっと　まあ　根付くと。 |

ここは「(a)（三日前に）尿素水を掛ける」「(b)苗が黄色くならないうちに本田に移す」「(c)本田で養分が効く」（ここまで「過程」）「(d)苗が根付く」（結果）という順に連続的に事態が展開するという談話構造になっているが，その中で特立した過程の発話に文末詞ソが用いられていることが確認できる。それは特立的な過程(a)と結果(d)が因果関係を持つのと同様に(b)と(d)，(c)と(d)も因果関係を表すが，その中で結果に最もコミットする過程は(a)であることから確認できる。

精神的活動の過程すなわち根拠については断片 9 及び 10 の発話に文末詞ソが用いられていることを確認した。これらは大前提となる一般的な根拠を示すことによって話し手の肯定的な或いは否定的な評価を暗示する発話である。話し手の思考或いは判断の結果を暗示するにはその根拠は不動で強いものでなければならない。それは一般的な原則や大前提であり，根拠のなかで最も「特立」したものである。

一まとまりの動態的事態の結果については断片 11 及び 12 の発話に文末詞ソが用いられていることを確認した。複数の可能性のある過程的な事態とは異なり，結果的な事態は唯一である。したがって「特立性」の解釈は生じない。ここで断片 12 とその後の展開を考察すると，文末詞ソの発話によって一まとまりの事態の終結が明示されていることが分かる。次は話者 A の発話だけを集めたものである

**断片 12 を改変して再掲**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 319 | A | イケンソ。　アリャー　タタキツチデナ。 | だめなんだ。　あれは　たたき土でね。 |
| 321 | A | アノ　アノ　アカドロト | あの　あの　赤泥と |
| 322 | A | イシバェト　セメントー　マゼテナー。 | 石灰と　セメントを　混ぜてな。 |
| 325 | A | コー　ダンゴノ　ヨーナ　モノ　コサエテカラ<br>アェ　アェエダ　ヤ　コー　ヤッチョエテナ。<br>ピシャート　ヤッテカラ。　ウエ | こう　だんごの　ような　ものを　作って<br>（アェ）　間を　（ヤ）　こう　やってお<br>いてね。　ピタッと　やってから。　上 |
| 326 | A | アノー　ナカモ　ソトガワモ　ミナ　**ヌリコムソ。**　＊＊＊ | （あの）　中も　外側も　みな　**塗りこむんだ。**　＊＊＊ |
| 327 | A | ヘーカラ　X3 ノー　ソコノ　X3 ノ　ケーシャノ<br>アノー　ソトガワノ　アノ | それから　X3 の　そこの　X3 の　鶏舎の<br>あの　外側の　あの |
| 328 | A | オーキナ　タンクガ　アルイ。 | 大きな　タンクが　あるよ。 |
| 330 | A | ソレモ　ワシガ　ツイタホイナ。 | それも　俺が　築いたんだよね。 |

話者 B の長男の処理が気に入らないという話者 A の話は一旦 326 行目で終結し，327 行目からは「鶏舎のタンク」の話に移っている。断片 11 では文末詞ソの発話をきっかけに相手によって発話権が奪われる。

**断片 11 の再掲**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 159 | A | オイサン　モー　エカローカェエ。 | 「おじさん　もう　いいだろうか」。 |
| 160 | A | エーッチャー。 | 「いいってば」。 |
| 161 | A | オレ　マタ　ナカ　ハェエテ　ミル　ユーテ　ハェエテ　ミタ　トコロガ。 | 「俺が（マタ）　中に　入って　みる」と言って　入って　みた　ところが。 |
| 162 | B | ンー　ンー。 | うん　うん。 |
| 163 | A | エー　ヤキガ　デテナー。　ミズガ　デョーガナ。　ドンドン　ドンドン。 | いい　土の層が　出てね。　水が　出ているんだよ。　どんどん　どんどん。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 164 | B | ホー。 | ほう。 |
| 165 | A | マー　コレカラ　ウヤー　ナンボ　ホッタッテノ。　イガワガ　ヨケー　イルダケ　ソンデヤッテ　**ユーソ**。 | まあ　これから　上は　いくら　掘ったってね。　井戸の内側の囲いが　たくさんいるだけ　損だよと　**言ったんだ**。 |
| 166 | A | ジューブン　ミズガ　アルカラ　ヤメーッテ　ユーテ。 | 十分　水が　あるから　やめろと　言って。 |
| 167 | B | アノー　ソコワ　ドネー　ナッチョッタホカナー。　アン　ギダギダ　スルー。 | あの　底は　どのように　なっていたのかな。　あの　ぎとぎと　する。 |

165 行目で一まとまりの事態の結果，166 行目の補足説明の直後に話者 B の質問が投げかけられている。以上のことから，一まとまりの動態的事態の結果を表す発話に用いられる文末詞ソは連続性の終結を強調するものであると言える。

精神的活動の結果については断片 13 及び 14 の発話に文末詞ソが用いられている。断片 13 の必要な部分だけを次に再掲する。

**断片 30 を改変して再掲**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 171 | A | チョット　イヤ　イワジャナー。　ヤケタナー。 | （ちょっと）　いや　岩ではない。　焼けたような。 |
| 173 | A | ソーガ　コー　デチョッタホ。 | 層が　こう　出ていたんだ。 |
| 175 | A | ソレカラ　プッププップ　デルイ。　ミズガー。 | そこから　ピュッピュピュッピュ　出るんだよ。　水が。 |
| 178 | A | アノ　ソーガ　デタラ　モットモ　**エーソエナ**。 | あの　層が　でたら　いちばん　**いいんだよね**。 |
| 179 | B | アー。　ソレカナー。 | ああ。　そうなの。 |

171-173-175-178 行目で話者 A が下した判断結果の後に話者 B は何らかの反応を示さなければならない。即ち判断結果を表す文末詞ソが用いられることによって A による判断結果が明示的に示されたからである。断片 14 も同様である。

**断片 14 を再掲**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 314 | B | ハー。　ソーカナー。　ハー　ハー。　ツイダツナェエデナー。　タダー　アノ　カサネテ　ヌッタダケ。 | はあ。　そうなの。　はあ　はあ。　継いだ　繋いでね。　ただ　あの　重ねて　塗っただけ。 |
| 315 | A | ハー。 | はあ。 |
| 316 | A | ウンー。　イケンイ | うん。　だめだよ |
| 317 | A | **イケンソー**。　アレジャー。 | **だめなんだ**。　あれでは。 |
| 318 | B | ハー　アレジャー　ヤッポ　イケンジャロ。 | はあ　あれでは　やはり　だめだろう。 |
| 319 | A | **イケンソ**。　アリャー　タタキツチデナ。 | **だめなんだ**。　あれは　たたき土でね。 |
| 320 | B | ハー　ハー。 | はあ　はあ。 |

314 行目で話者 A は判断結果を伝えるが，315 行目では文末詞ソを用いてさらに強調している。話者 B はそれに何らかの反応をしめさなければならないが，318 行目で曖昧な言い方で答える。319 行目で A はもう一度繰り返し，文末詞ソを用いて判断結果を繰り返し，320 行目で B はそれを認めるといった談話構造が示している。以上のことから，精神的活動の結果を表す発話に用いられる文末詞ソはその結果を強調するものであると言える。

以上，文末詞ソは一まとまりの事態の過程および結果を表す発話に用いられ，それぞれ全ての過程の中で特立した過程を特立させること，或いは結果を強調する働きをすることを確認した。

一方，文末詞ホは聞き手への持ちかけ度が極めて強く，話し手の発見による驚き，自慢による強調，聞き手の未認識に対する強調で用いられることを確認した[8]。持ちかけ度の強さはその後の発話での話し手の念押し（断片 19，22）や聞き手の認識の変化（断片 20，21，23，24）から説明可能である。

また，文末詞ソジャ（断片 15 及び 16）とソカ（断片 17 及び 18）はいずれも一まとまり事態の結果を表す発話で用いられることを確認した。一まとまりの事態の過程を表す発話で用いられないことから，文末詞ソジャはコピュラによって一まとまり性を締めくくる性質（結果性）を帯びていると考えられる。また，文末詞ソカも同様の一まとまり性を締めくくる性質（結果性）を持つと仮定すると，一まとまりの事態の過程を表す発話には用いられない現象が説明できる。よって文末詞ソジャ及びソカは一まとまりの結果を表す発話にのみ用いられる。

文末詞ホジャ（断片 25，26 そして 27）とホカ（断片 28 及び 29）はいずれも相手が発話権を持っているときに発話権を取るときに用いられることを確認した。これは聞き手への持ちかけ度が高い文末詞ホの性質から想定される働きである。

最後に共通語の「のだ」との関連について触れておきたい。「のだ」についてはさまざまな説明がなされてきたが，本稿の用語を使うと次のように解釈できる。田中（1980）の「事実文」による説明[9]は「精神的活動の過程（根拠）」の提示に，「判断文」による説明[10]は「精神的活動の結果（結論）」の提示に該当する。田野村（1990）の「背後の事情」[11]は「一まとまりの動態的事態の過程」に，「実情」[12]は「聞き手への強い持ちかけ」に該当する。益岡（1991）の「背景説明」[13]はここで言う「一まとまりの事態の過程」の提示に，「帰結説明」[14]は「一まとまりの事態の結果」の提示に該当する。

それぞれの研究で特徴的な概念（「事実」と「判断」，「事情」と「実情」，「帰結」と「背景」）で「のだ」文が分析されてきた。それぞれは「のだ」文の特異な特徴を捉えるのに優れた見方であったが，包括的な捉え方ができたかどうかは疑問である。本稿は「のだ」に対応する二つの形式を持つ豊関方言の分析を行うことによって「一まとまりの事態」の原因と結果を表す発話に用いられる形式と「聞き手への強い持ちかけ」を表す発話に用いられる形式が異なっていること，そしてこの二用法でこの二つの文末詞の現象を包括的かつ実証的に示すことを明らかにした。このことは共通語の「のだ」の用法においてこの二つの類型に分類することも可能であろうということを示している。さらに「のだ」形式の歴史的成立や用法の分化などとも関連しているのではないかと予測される。

また，いわゆる話者の「把握」[15]を表す「のだ」に対応する文末詞については対象とするデータからは用例が採取されなかった。おそらくこの方言の文末詞ソ或いはホはこの用法を持たないと予測される。このことも共通語の「のだ」形式の成り立ちや用法の分化などと関連すると思われる。しかしながら，これ以上は本稿の趣旨から外れるので別稿に委ねたい。

【註】

[1] 現在の山口県宇部市は「大部分が 「長門国」 に該当するが、 一部 「周防国」 だった地域 （東岐波・ 西岐波など） がある」 ことから、 形式名詞あるいは文末詞でホとソの使用が可能であるとされている。しかし，両形式は使い分けなく用いられるのではなく，豊関方言に似た振る舞いや働きをすると筆者は考えている

[2] 聞き手への働きかけはもちろん，情報提供であっても Sperber and Wilson（1995）の提唱する関係性理論でも聞き手の認知環境を改善するといった作用を認めることができる。その理論の概説書である今井（2001）では認知環境を改善する認知効果（cognitive effect）に「新しい想定の獲得」「不確かな想定の確定化」「誤った想定の放棄とそれに代わる想定の獲得」の三種類を挙げている。

[3] 吉田（1988）では「聞き手に情報（聞き手が知らないことがら）を提供する」ことを「教示」，「聞き手に情報（聞き手が信じていないことがら）を提供する」ことを強調と規定している。田野村（1990）の「披瀝性」と深く関連する。

[4] 本稿の「提示」は野田（1997）の「対人的なムードの「のだ」」と基本的に同じ概念である。野田氏はそれを「P の事情・意味として Q を提示する」という「関係づけ」の用法と「Q を（既定の事態として）提示する」という「非関係づけ」の用法に分けるが，本稿では，前者は文末詞ソが持つ「一まとまりの事態の過程」の用法に対応し，後者は文末詞ソが持つ「聞き手への持ちかけ」の用法に対応すると思われる。そう考えると，文末詞ソが持つ「一まとまりの事態の結果」の用法については明示的には触れられていないように思われる。

[5] 中田（2024）は本稿の予備的な研究として，すべての文末詞ソとホの断片を談話データの出現順に例示し，それぞれに対してその機能を考察した。そこでは文末詞ソの機能を「場面説明」と「補足説明」としたが，前者はほぼ本稿の「一まとまりの事態の過程」，後者はほぼ「一まとまりの事態の結果」に対応する。

[6] 中田（2024）では文末詞ホの機能を「注目引き」と「情意表明」としたが，前者はほぼ「聞き手の未認識に対する強調」，後者はほぼ「発見による驚き」と「自慢による強調」に対応する。

[7] 田野村（1990）は「のだ」文の特徴として「承前性」「既定性」「披瀝性」「特立性」を挙げるが，特にどのような条件のときに「特立性」を持つかは明示していない。本稿では文末詞ソが一まとまりの動態的事態の過程を表す発話に用いられるとき「特立性」を持つことを明らかにした。またこのことは共通語の「のだ」形式にも当てはまると考えられる。

[8] 文末詞ホに文末詞チャをついたホッチャの形式で，山口県宇部市方言では「…ホッチャ。…ホッチャ。…ホッチャ。」というふうに連続して用いられることがあるが，文末詞ホは一まとまりの過程及び結果のいずれでも用いられうるので，連続的に用いられることがあっても不思議ではない。筆者はこれはそれぞれの段階を一つ一つ聞き手に強調して伝えるときに用いられるものと考えている。

[9] 田中（1980）は「風邪を引いた。熱があるのだ。」の「のだ」文を「風邪をひいた（判断文）トカンガエル。熱がある（事実文）トイウコトカラワカル。」と捉えている。

[10] 田中（1980）は「熱がある。風邪をひいたのだ。」の「のだ」文を「熱がある（事実文）トイウコトカラミテ，風邪を引いた（判断文）トイウコトガワカル」と捉えている。

[11] 田野村（1990）は「きょうは休みます。体調が悪いんです。」の「のだ」文を「背後の事情」を表すと捉えている。

[12] 田野村（1990）は「ぼく，大きくなったらパイロットになるんだ。」の「のだ」文を「実情」を表すと捉えている。

[13] 益岡（1991）は「私は国立大学を２つ受験した。当時は，一期校と二期校に分かれていたのだ。」の「のだ」文を「背景説明」としている。
[14] 益岡（1991）は「当時は，国立大学を 2 度受験できた。とても幸運な時代だったのだ。」の「のだ」文を「帰結説明」としている。この例は本稿の「精神的活動の結果」と解釈できるだろう。
[15] 野田（1997）はムードの「対事的ムードの「のだ」」の機能を「関係づけ」及び「非関係づけ」の用法に分け，前者を「P の事情・意味として Q を把握する」，後者を「Q を（既定の事態として）把握する」としている。

**【参考文献】**

今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店
国立国語研究所 （2003） 『全国方言談話データベース 「日本のふるさとことば集成」 第 15 巻 広島 ・ 山口』 国書刊行会
田中望（1980）「日常言語における“説明"について」『日本語と日本語教育』8
田野村忠温 （1990） 『現代日本誌の文法 I』和泉書院
中田一志 （2012） 「「のだ」 の結果用法と過程用法」 『日本語 ・ 日本文化』 38
中田一志（2024）「長門方言の文末詞ホとソについての一考察」『日本語 ・ 日本文化』 51
野田春美 （1997） 『「の（だ）」 の機能』 くろしお出版
蓮沼昭子 （1988）「続日本語ワンポイントレッ ス ン」『言語』17−6
平山輝男， 有元光彦編 （2017） 『山口県のことば 日本のことばシリーズ 35』 明治書院
藤原与一 （1986） 『方言文末詞＜文末助詞＞の研究 下』春陽堂書店
舩木礼子 （2000） 「山口方言の文末詞チャ」『阪大社会言語学研究ノート』 2
堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
Sacks, H., Schegloff, E. A., and Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
Sperber, D. and Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Wiley-Blackwell.

**付記**：本研究は科研費 19H01262 及び 22K00598 の助成を受けたものです。

**キーワード**：「のだ」文，豊関方言，一まとまりの事態の過程と結果，聞き手への持ちかけ